令和３年度　第１回酒田市総合教育会議議事録

開催日時	令和３年７月５日（月）13：30～15：00
開催場所	酒田市役所３階　第一委員会室
出席者	丸山至市長、鈴木和仁教育長、渡部敦委員、神田直弥委員、 村上千景委員、（欠）岩間奏子委員
（市長部局）	竹越攻征総務部長、宮崎和幸企画部長
（事務局）	池田里枝教育次長、齋藤一志教育次長、高橋浩平企画管理課長、阿部周学校教育課長、五十嵐敏剛指導主幹、阿部武志社会教育文化課長、齋藤聡スポーツ振興課長、岩浪勝彦図書館長、杉山稔企画管理課長補佐、工藤充学区改編推進室長
協議事項	本市の教育を取り巻く諸課題について

１　開会

（池田教育次長）

それでは、これより令和３年度第１回酒田市総合教育会議を開会いたします。

本日の会議の進行をさせていただきます教育次長の池田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

本日は岩間委員が都合により欠席となっております。

本日、４名の方から傍聴の申し出をいただいております。なお、本日の資料につきましては、傍聴される方へも配布させていただくこととします。

最初に、丸山市長からご挨拶をお願いいたします。

２　あいさつ

（丸山市長）

皆さんお疲れ様でございます。今日は大変お忙しい中、今年度の第１回目の総合教育会議に出席頂きましてありがとうございます。今日は岩間委員が都合により欠席という事で残念ですが、今回何をテーマにお話ししようかと思った時に、実はこの総合教育会議というのは教育委員会の事業というよりは、市長部局の事業という事で組ませて頂いている訳ですけれども、今回４月に人事異動がありまして、教育長が鈴木教育長に代わったということ、前の村上教育長から鈴木教育長に代わって、そして事務局のスタッフも教育次長、今司会進行が池田教育次長でしたけれども、新しく教育次長になった。それから、総務部長も竹越ですけれども新しく代わったという事もあって、何をテーマにしようかなと考えたのですが、私も実は新しい鈴木教育長の教育論なるものを拝聴したことがなかったものですから、教育委員の皆さまとも何か懇談をしたりする場があったのかなと思って聞きましたら、そういった事も実はなかったという事だったので、それでは今日はせっかくなので鈴木教育長の教育に対する考え方、特に本市の学校教育についてどのようなお考えをお持ちなのかをじっくり聞きたいなと。しかも３ケ月ほど経ちましたので、現状も一定程度頭にお入りになったのかなと

思いますので、その意味で少しお話を聞いて、そして教育委員の皆さまと少し懇談できればいいかなとそういう総合教育会議にしたいという事で、企画をしたものでございます。資料も教育長から作って頂きまして、私もさっと目を通したら大変興味深い内容になっていましたし、是非鈴木教育長の日頃考えている教育に対するご自分の考え方、そういったものに触れる機会にしたいなと思っております。ご存じの通り、鈴木教育長は高等学校から教育長として就任されております。前の村上教育長が小学校の担当でしたので、また見方も違っているところもあろうかと思いますし、そういった意味で少し私自身も勉強させて頂く機会として、この教育会議を位置付けさせて頂きました。酒田市の教育の在り方について少し皆さんと意識を共有できればいいかなという思いでいるところでございます。以上でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

（池田教育次長）

続きまして、鈴木教育長からご挨拶をお願いいたします。

（鈴木教育長）

改めまして皆さんこんにちは。教育委員会を代表しまして、一言ご挨拶申し上げます。本日は丸山市長に本当に公務ご多忙の中、総合教育会議を開催して頂きまして、ありがとうございます。また、今お話にもございました通り、私の考えていることについてという事で、忙しい中皆さまにも貴重な時間を割いて頂いて、お話しする機会を与えて頂いたという事について、重ねて感謝申し上げたいと思います。ありがとうございます。

ただ今市長からもありました通り、高校、しかも私の場合は専門学科の教員でございますので、いわゆる普通科、普通高校というのではなく、ずっと実業高校、専門高校を歩んできた人間ですので、だいぶ角度は違うのではないかと自分では勝手に思っております。でも、基本は皆さんと同じだろうなと思いながらも、そんなところも踏まえて今日お話をさせて頂こうと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。本日は誠にありがとうございます。

３　協議

（池田教育次長）

それではこれより協議に入ります。ここからは市長に座長をお願いいたします。発言の際には皆様は座ったままでお願いいたします。

（１）本市の教育を取り巻く諸課題について

（丸山市長）

それでは協議に入りたいと思います。本市の教育を取り巻く諸課題についてという事で、テーマ設定はさせて頂きましたけれども、これからの学校教育について、鈴木教育長からご自分が考えるこれからの学校教育についてのお話を少しお聞かせ頂いて、それを基にして皆

さんと協議をさせて頂ければと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

（鈴木教育長）

それでは、しばらくの時間を頂戴しましてお話したいと思います。最初に宮崎駿さんのものを持ってきたのですけれども、私も長い事やってきて、現場の先生方みんな一生懸命やられていて、毎日毎日忙しい中で毎日を繰り返している訳ですが、そういった中で皆さん思いは沢山持っているのにも関わらず、そうは言ってもなかなか無理じゃないかと諦めている事が結構あるような気がしていて、一方でなかなか無くせない、引き算していけない、仕事がどんどん膨らむだけというところから、そんな思いもありまして、ただ同じ方向は向いていたいという思いがありますので、こんな少し理想というか教育理念というか向かうところは皆で共用しながら、現実の問題にあたっていきたいという思いで載せさせて頂きました。従いまして、そこへ向かう手段は色々あるだろうと思いますので、思いの共用だけをという事で載せました。最初の資料には無かったのですが、これを挟ませて頂きました。今週の水曜日に志水先生がいらっしゃるものですから、もう１回何冊か読み直していた時に、実は「学力格差を克服する」というのは新書ですけれど、これの第５章の最後の章に公教育をどう再構築するか、展望という事で書かれていたのでした。本市でも共生社会なんていう事を言っている訳ですけれども、ここにも同じような事が志水先生は書かれていて、「共生社会、それはまったくの理想であり」と中段位にありますが、だけども立ち止まっている訳にはいかないというような事で、私が１枚目に書いたことと同じようなニュアンスのものが実はあったものですから引用させて頂きました。この中で志水先生の要点としては、ここには引っ張ってきていないのですが、差別や抑圧のない真の行政社会と呼ぶべきものの構築に向けて、新たな学校システム像を提起するという事で、この章を書かれていました。非常に共感しまして、水曜日に是非このことで色々とお話をしたいと個人的に思っていたものですから、引用させて頂きました。その中にこんな表現があって、面白いなと思ったのですが、非常に私の中にはストンと落ちてきまして、共生社会のイメージとして志水先生は書かれていました。Ａ＋ＢがＡ‘＋Ｂ’＋αという事で、色んな人が出会えばぶつかる。でも、それぞれＡもＢも志水先生はマジョリティとマイノリティと表現をされていましたけれども、お互いが変わる事で新たな価値が生まれてくるという事で＋αということを考えていて、私の中にはストンと落ちてきたんです。まさにこれだなという事で、これから本市の教育目標に辿り着くところでまたお話しますけれども、それぞれ先生方も子ども達もそうですけれど、色んな事を体験していきながら折り合いを付けていくというか、自分の事を主張しながらも自分も変わって相手の意見を受け入れることも出来るようになっていって、新しい何かお互いが納得できるものを作り出していくという事だろうと思っておりました。他の事についてはここでは省きます。これまでの日本はという事で一番下にこんなふうに志水先生は書いておられました。Ａ＋ＢはＡ＋Ｂというので、これは分離主義という言い方で志水先生は言われていました。これについては後でまた触れたいと思います。そんなことを思いながら、改めて第２期の酒田市の教育振興基本計画で作った本市の目標ですが、まさに今のところだろう、学びあい共

に生きるというところだろうと思います。ここをぶれさせないで目指していきたいという事です。これは現場の先生方皆分かってらっしゃると思いますが、なかなかというところがあるだろうと思います。その辺はこれからお話したいと思います。

私の中では、平成 17 年頃から 4 校が合併して酒田光陵高校になったあたりから、教員生活の後半の 15 年位はほとんどそこに関わってきたので、色んな事を想うところはあったのですが、やはり学校とは何だろうなという事で改めて、ここでは本質と書きましたけれども、ここでいう本質というのは、多くの人達が了解できる共通了解という意味で書かせて頂きました。色んな考えた方があるので、これが正しいとかこれは違うという事ではなくて、色んな考え方がある中で、高校はお互い了解できるのではないかなという意味で本質というふうに使わせて頂いています。共通了解。最近の教育哲学の方々はよくそういう言葉を使われていたので、分かりやすいかなと思っておりました。全ての子どもが自由に生きられるための力を育む、これはその通りだと思います。その中にはいわゆる見える学力であったり、思考力・判断力・表現力であったり、見えない学力と言われるものだったり、色んなものが入ってくる訳です。自立した子ども達をイメージしている訳ですが、それぞれ自分の自由を、お互いの自由を認めていくというか、それがこの「「自由の相互承認」の感度を育む」という表現で、熊本大学の苫野先生は表現されていて、今のところ私の中にこれが一番ストンと入ってくる基本原則、ここをぶれさせずにやっていきたいなと考えておりました。同じようなことをこれも皆さんご存じだと思いますけれども、これは OECD の Leaning Framework というものですけれども、これについては、1997 年から約 6 年か 7 年の時間をかけて世界の著名な研究者たちがこれからの教育の目的という事で考えて作ったものです。2003 年に最初報告されているはずです。1997 年というのは、皆さんご存じの通り日本では山一證券が倒産したり、拓殖銀行がとかそういう時期ですね。完全に日本の経済がピークアウトした時と言われている訳ですけど、その頃から既に 2030 年を見据えてこういうことを研究していた。Well-Being という言葉は随分前から出ているはずですけれども、個人と社会の幸せに向かってやっていこうという事で、大きく責任を取れる力、それを自立という表現にしています。あと一番下の尊重ですね。言語的には Tensions と Dilemmas なので、障害とかジレンマを調整していくというイメージがあると思いますけれども、対話によって調整していく。それを尊重という事で最近の学校関係者が言っていたりします。この 2 つが非常に大事だよねという事で、自立と尊重。そこがきちんと育てばおそらく想像力は付いてくるだろうというような事をよく最近皆さん言ってらっしゃるようです。先程のものと表現こそ違いますが、言っていることは同じだと私は感じます。今、Well－Being というお話をしましたけれども、より良い社会を作っていくため、その創造を担うような次世代、子ども達を育てたい訳ですが、良い社会って何だろうという事で、酒田では公益という表現をしますけど、どういう事なのかなと自分なりに考えたくてあちこち見ていたのですが、たまたまルソーと言えばもう 250 年も前の方で、どちらかと言えばエミールの方が有名なのかもしれませんが、社会契約論の中にこんな表現がありました。「個別意思の総和から「衝突し合う私的な利益」を差し引いて、見出された合意」という事です。これは、言葉変えれば公益そのものではないかなと私は思っていたので

すが、こういった社会を皆で作っていこうと思えるような子ども達になっていって欲しいという事な訳ですね。こういう事は日常学校生活の中でよくあることで、例えば昨年でしたか、運動会とか球技大会が中止せざるを得なくなって、光陵高校に勤めていましたけれども全部止めざるを得なくなって、それでも何かやって欲しいなと思って全部子ども達に投げて 12 月に何かやっていいよという時間を作りました。そうしたら、色んなやりたい事が出てきた。それを自分たちで引き算していって、結局残ったものだけでやっていました、丸一日かけて。まさにこれだったのですけれども、そうしたところ、約 1,000 人もいる生徒が、通常、学校行事をやると保健室に行ったり、ちょっと嫌だなと思う子がいたりするのですが、一人もそういう子がいなくて、それぞれの活躍できる場所、例えばビブリオバトルだとか縄跳びだとか、かるただとか、子ども達が色んなものを企画しました。そうしたら、誰一人としてそこからはみ出る子がいなかったのです。結果的にすごい行事になったなと思ったのですが、まさに自分達で一人も取り残さないで皆で出来る共通項を見出していって行事を作っていったという事になります。一番問題なのは、これは皆さん誰もがおっしゃる訳ですが、日本財団が 2019 年に行った調査結果です。世界 9 か国です。それぞれの国で約 1,000 人に取った調査ですけれど、全体的に日本は低いわけですけど、特にという事で、「自分で国や社会を変えられると思うか」18.3%という事です。「自分は大人だと思うか」というのもそうですし、特に「自分で国や社会を変えられると思う」が 18.3%というのが何とかしなきゃと思う訳です。それから、妹尾昌俊さんの本から持ってきた「自殺者の数」です。これについては今ここでは詳しくは触れません。それから、これは昨年度の学校休校中のものを妹尾さんが調査したものです。学校はどういうふうに対応していったかというと、これはつまり、プリントだとかをとにかく刷って、渡して、やってこいというもので、残念ながら探求的な学び等も殆ど無かった。沢山時間があったにも関わらず、残念だったねというようなお話が出ておりました。次に、これは 2009 年から 2018 年までの ICT の活用度の推移を調査したものです。要は 2009 年から他の国が右の上の方にずっと点が動いているのにも関わらず、日本だけは 2009 年から 2018 年見ても殆ど変わっていないというふうに読み取れる訳です。つまり、本当になかなか変われないという事な訳です。これは実は 4 月当初、最初に市内の校長先生方に集まって頂いてお話した時に、これとは別に明治時代からの教室の風景を写真にして見て頂きました。今の時代になっても、パソコンとか生徒は机に置いている訳ですけれど、先生が一人いて皆同じ方を向いてやっているというのは明治時代からずっと変わらないというので、校長先生方にはそれをご覧頂いて、私自身がある保護者から学校ってタイムマシンだよねと言われた話をしました。つまり、時代がすごく変わってきているのに、どんどんスピードを上げて変わっているのに、学校ってなかなか変われないよねという意味で、学校に行くと何十年も前の生活に戻ったような感じがするという意味で、タイムマシンだねという表現をされたのですが、そういう事を象徴しているところがあったと思います。

「学習する学校」という本がございまして、この中には、障がいのある子はこっちでとなる訳ですが、そうではなくて、障害はそもそも教育システムの方にあるのではないかという事を書いています。色んな例が出ていますけれど、私はこれが一番印象に残っております。

実はこれと同じような事を志水先生の本の中にこんな表現であります。「学校は支援と称して、子ども達を障害・不登校・外国籍・学力といった指標で分類し、別の場所を設定して学ばせようとする。しかも、これらはきめ細やかな指導として評され、教職員や保護者に受け入れられている。この支援の方向性が、ますます格差を助長し、支援の連鎖を生むことは無視されている。」こんな表現がありまして、グサッとくるのですけれども、今までやってきたことが決して全部悪い訳ではなくて、日本の教育は素晴らしいと思いますが、その中でも変わっていかなければならないところは変わっていこうよという事なのだろうと思います。そういう意味でここに書かせて頂きました。日本の教育は決して悪いとは思いませんし、先生方も毎日本当に頑張ってくださっていますので、先生方が悪い訳ではなくて、今のシステムそのものに問題があるだろうということで、じゃあ出来るところから少しでもシステムを見直していければいいのではないかというふうに考えているのが今現在です。ここ 5 年位そんな思いで学校を運営してきたつもりです。ただ、例えば、私が 3 月まで勤めていた学校もそうですが、中間テスト無くそうかとか期末テスト無くそうかとか、小テストに変えていかないかと言っても、圧倒的に支持を得られませんでした。なので、唯一無くしたのが、5 月の最初の中間テストでした。やはり、評価は、テストをやって点数が出てきたもので評価するものだというのが染みついてしまっていて、評価と一緒にという事で、実は学習指導要領も変わったので、学校として大きな目標を教育表での評価表を作って学校終わって出てきたところだったのですが、その表に基づいて普段の授業なんかもやっていけば少しは良いのかなと思いながらいたところです。いずれにしても、同質性って非常に高いと思っていまして、それが先程の自身の問題であったり、いじめの問題であったり、色んな事に私は大きく影響していると思っています。

次の表紙をご覧頂くと、じゃあどういうふうに変わればいいのかという事になる訳ですが、1 つの参考とすべきものとして挙げさせて頂いたのがこれと次のものです。これは、神奈川県藤沢市にある「あおいけあ」という理想とする介護施設ですけれど、ここに書かれている事は今の学校、特に必要なもの全部入っているなと思って読んでいました。ホームページには漫画バージョンしかないのですが、本の中には文章が沢山入っていて、この中で加藤さんが「こちゃまぜ」が当たり前で「分ける」事ですなわち分断から始まる共生なんてあるのでしょうか？という事をズバリ書いていて、いちいち刺さってくるんですね。志水先生の言葉もそうですし、苫野先生の言葉もそうですし、皆同じようなことを言ってらっしゃるのかなと思っています。そう思いながら学校現場を眺めてみると、最近取り上げられている 6 月後半の NHK の E テレで、「ウワサの保護者会」という番組でもここにある学校が取り上げられていました。それぞれ先進的な取り組みをしている学校です。大日向、軽井沢、新渡戸、それから伊那小学校はもうだいぶ古くから探求をやっていて、通知表もなければチャイムなども鳴らしてないはずです。そういう学校が公立でも何十年も前からやっているところはあるんです。一人一人を尊重しながら。それから一番下に書いた白川郷学園は、小中一貫教育をしながら 2017 年に義務教育学校に変えていった。形としては今の酒田市に似ているのかなと思っています。それぞれ公立も私立の学校も様々ありますが、それぞれ特徴のある学校で、一

つの参考となる取り組みをしているところだなと思います。参考としたい学校に共通していることはこんなところですが、なにしろ一人一人にスポットを当てる、先程の同質性とは相反する取り組みをされています。今、個別最適化という事を経産省は言っていますけれども、私はあまりしっくりこなくて、個別化でいいのではないかなと思っています。それぞれ個別の学び、それから協同化とあえてこの字を使っていますけれども、しかもそこに「ゆるやかな」と付けましたが、皆でやらなければならないとなるとそれもまた圧力になるので、ゆるやかな協同だとか、探求の学びというものが上手に組み合わさって、しかもこれまでの一斉授業の良い所なんかも取り上げつつ、左に行ったり、右に行ったりしていくような毎日の授業が展開されればという思いがあります。GIGA スクールなども１人１台パソコンありますけれども、一人一人別々の事をやっていたとしても、例えばある生徒が分からないことがあった時に数人が集まって教え合ったり、その集まって教え合っているところに先生が入って４・５人を相手にして一斉授業のような事をやったり、というような共通の風景に変わっていけばいいなと思っています。現に少しずつですけれども、全部の教科を一気には無理だとしても、やりやすい所から少しずつ少しずつ変わってきているのではないかというふうに捉えています。その中で、納得、対話とか尊重とかですね、皆で納得する会を見出していく力とかという事は凄く大事なのかなと思っています。面白いのがあって、ここには書いていませんが、最近色んなところで取り上げられている麹町中学校の工藤先生、工藤先生だけではないのですが、昔はどちらかというと世田谷の桜丘中学校の西郷先生が好きだったのですが、その方は東京都では再任用で校長が出来るので、65歳で校長をされていたかと思います。同じように校則を無くしたり、色んな事をやっているのですが、今書いているような事をやろうとすると、先生方が大変だとよく言われる訳ですけれど、今やっていることをどんどん止めたらいいのではないかとおっしゃっています。服装指導とか挨拶指導とか研究授業とか指導案を書くとか。私は高校の教員なので、いちいち頷けてしまうのですが、それをいきなり小学校や中学校の先生に指導案要らないよねと言うと、これまたなかなか問題があるので、その辺は少しずつお話をしながらケースバイケースだと思いますが、やはり見直していく、何か引き算して減らしていく事が必要なんじゃないかなと。向かうべきところに向かうためにという事を皆さんと話していく中で無くせるものは無くしていいのではないかなと思います。自立を目指すのであれば、というような事も踏まえて服装指導だとか挨拶指導だとか。挨拶指導は昇降口で「おはようございます。」って生徒達がよくやると思いますけど、あれをやると学校に入れない子、入っていけない子がいる。それを非常に嫌がっている生徒がいるのという事を分かってやっているならいいのですが、それぞれ一人一人というのはそういう事で、これまで良かれと思ってやっていたことが、決して皆にとって良いものではないという事を一方で考えながらやっていく。挨拶が良いか悪いか、挨拶が大事か大事じゃないかという事ではなくて、それ自体が物凄く圧力に感じてしまう子も中にはいるという事も一方で考えていく必要があると思います。そういった意味で、出来るところからという事で、ここにはいくつか主だったものを上げました。

最後に、安心できる環境という事で、心理的安全性という事を書きましたけど、多くの子

ども達は安心して学校に行って、学校で友達と何でも話せて、何でも先生方と話せると思いますけど、そうでない子がいるというのも事実だと思います。そこも含めてもう1回皆で考えていきたいなという思いがあります。例えば、今現実の問題としては、ワクチンの問題があります。打つか打たないかで子ども達同士でどうして打たないのかという事でトラブルが起きるのが嫌だから、なるべく打ったか打たないか分からないようにしたいと全国どこでも思っていますが、そうでない学校もある訳です。「俺、打たないよ。」とか平気で言えてしまう学校もある訳です。どっちが良いかと言ったら、そっちが良いに決まっています。周囲に自分はどう思われるだろうかと心配しなくていい、自分を素直に表現できる、そういう環境の方が良いに決まっているので、目指すべきはそこなのだろうという意味であえて書かせて頂きました。そういう空間があれば、学校が皆にとって安心安全で、何でも話せる、何でも相談できる場所になってくるだろうと思います。

次は、これもまた大昔の、大昔と言っても 1900 年代の方ですけれども、「心の安全基地」なんてことを言っていますが、これは義務教育の 9 年間で学校がすごく安心で、何でも自分を表現できる、間違いを恐れることなく安心して失敗できるような空間になっていくだろうと思います。今からそういうところに向かっていこうとすれば、次の 10 年でそういう空間が出来ると思うんのですが、問題はその後、そこで育った子ども達は高校に行き、大学に行き、色んな社会で揉まれていく訳ですので、この 9 年の間に自分の心の中にこの「安全基地」を作って欲しいという思いがあります。そういう意味で赤字にさせて頂きました。ちょっと抽象的ですけれども、そうでないと、そういう環境、地元で育っていっても、高校や大学に行った時にぶれてしまっては何にもならないので、自分の中にそういう心理的安全を担保出来るような安全基地を作って欲しいなと思っています。あと、この辺は実際の現場の中でよく言われることなので、挑戦した結果、成功と失敗と言いますが、失敗ではなくそれは種だという言い方をしたり、こういう言葉掛けで子ども達に決定させて常に考えさせる、自分で考えて決めさせる、というような事を心掛けて下さいねとかいうことが心理的安全性に繋がっていくのだろうという事です。そういうことをベースにして、今酒田市では小中一貫教育に取り組もうと。そして令和 4 年度から全ての小・中学校でというふうになっています。ですから 1 つのテーマとして 9 年間でそういった心理的安全性を自分の中で作っていけるような子ども達を育てたいなと思っております。酒田の教育目標、「公益のまち酒田の人づくり」に資するような取り組みになればなと思っています。ただこれはあくまで小・中一貫というのは足並み 1 つなので、絶対にこれでなければいけないと思っている訳ではありませんが、でも今ここに向かっていますので、この 9 年間を通して、いわゆる学力の保障ですとか、本市が目指すものを作っていきたいと思っています。1 年生から 9 年、約 10 年ですけれども、ここからの 10 年で皆がそういう方向を向いて、日々の授業、教室の風景を変えていこうとしていけば、10 年後はもしかしたらとてつもなく環境が変わっていて、私の夢というか、酒田の教育を受けさせたいねという事で、他の地域からも移り住むような、そういう教育が出来ればいいなと思っております。これは、今はまだ案の段階なので、小中一貫の学校教育課の方で取り組んでいる最上位の目標ですね。本市の教育目標と目指す人間像、ここに向かうため

にという事で、付けたい力という事で志水先生の学力の木ですけど、それを「学びの木」という事で、これもお見えになったら色々とご相談したいと思っていたところですけれども、こういった力をバランス良く、ただ、本市の小中一貫としては見えない学力のところに主に重点を置きたい、というような意味の図になっているのではないかなと思います。こんな資料を基にして、現在小中一貫推進会議を進めているところです。

学校としてはこんなことをイメージしていまして、これも妹尾さんの本にあった資料ですが、左下が現状だとすると、右にいくほど変革、変化を恐れない学校というか、どんどんどんどん変わっていこうとする学校ということです。上の方には教育関係者の関係性、信頼ベースになっている。右下のシナリオ 3 と書いてあるところが、完全に民営化されてネットを通じて授業を受けてという、角川でやっている N 高がここにくるのかなと思います。もう今や N 高からは昨年でしたか、あまり言いたくはないですけれども、東京大学だとか京都大学だとか、いわゆる私立の有名校がどんどん入っていくような事になってきている訳です。この図で言うとシナリオ 3 なんかは角川なんかになるのかなと思います。今現在シナリオ 1 だとすると、上のシナリオ 2、地域に開かれた学校とか、本市の場合は、この地域との関りが非常に上手く機能しているのではないかと思っているので、各学校区にコミ振もありますし、そういう意味では非常に進んでいるのではないかなと。取り組みとしては、文科省がやっている地域・学校連携協働だとか、学校支援地域本部というよりも以前から随分進んでいるのではないかなと思ってはおります。そこも含めて、やはり右に変化を恐れないで変わっていかなければいけないのかなと。シナリオ 4 ですね。皆で対話をしながら、学習しながら変わっていかなければいけないのではないかなと思っているところです。最近読んだ本の中ではこんな感じという事で紹介させていただきました。全部の学校がこういうふうになれるかどうかは分かりませんが、考え方としては参考にできるものがあるのではないかなと思います。

先程も学びの個別化とかゆるやかな協同化とか書きましたが、この 3 つある中でもやはり一番下の毎日の授業がいかに変わっていけるかというのがすごく大きなポイントだと思っています。先生方はどうしても教えたくなる訳ですけど、よく伴走者とかファシリテーターとか色んな表現を最近はされますけど、先生方の役割も変わっていくのではないかなと思っているので、この学びの個別化、協同化、探求化というのは非常に大きなポイントになっていくだろうと思います。先程出た新渡戸文化学園は、水曜日だけは何をやってもいいというようなフリーな時間になっていて、一人一人が自分の探求学習をするみたいなことをやっていましたけど、毎日 6 時間、7 時間やる必要はなくて、出来るところからで構わないので少しずつ変わっていって欲しいなと思います。私が 3 月までいた光陵高校では、普通科、商業科、情報科でスタディサプリというリクルートと学校契約して、自由に生徒達に勉強してもらっていました。そのため休校になってもあまり困らなかったといいますか、そういう経験があります。それから 3 年くらい前になりますか、これまで山形県の商業を学んできた子では 1 人も合格していなかった、チャレンジすらもできなかった日本商工会議所の簿記の検定試験 1 級というのがあるのですが、これにもチャレンジして合格する子が出ました。これは一人一人に応じたまさにそういう学びをした結果だと思っていて、そこに続く子たちがどんどんど

んどん増えてきていて、結果的に今その周りの子達はどうなっているかというと、引っ張られていて、今年の１年生、２年生は非常に良い結果が出ています。

それから、少子化はどこの自治体でも問題ですけれども、本市は何人以上減ったら複式だという決まりはある訳ですけれども、私は異年齢集団の学びなんていう事を書きましたが、複式が全く悪いとは思っていなくて、まさに異年齢集団の学びだろうと。ただし、要は同じ空間にいて、あなたは１年生の勉強、あなたは２年生の勉強、あなたは３年生の勉強とやっているうちはなかなか容易ではないという思いがあって、人数が減ってきたから複式がどうという事ではなくて、やはり毎日の授業をどう変えていくかというのがポイントだろうと思っています。大きな学校になっても構わないし、小さいままでも構わないのですが、要は日々の授業をどう変えていくかという事だろうと思っております。これまで話してきた目指すところを原点に戻って考えて、本当にこの目標をクリアしていこうと思ったのと、「ともに生きる」というのは私の中で非常に重い。「公益のまち」とか「ともに生きる」とか。「学び合い」はともかく「ともに生きる」というところまで行こうとすると非常に重いなと。ですので、本当に少しずつでも構わないので、変わっていかないと容易ではないというような思いがあります。

最後にもう１つ、先程ご覧いただきましたけれども、こんなものを今学校教育課の方で作って頂いていて、こっちで自立だとか尊重とか創造する力とか根っこの力を付けさせようと今考えていて、こういった市のビジョンを基に、各学校区の目標立てに入って頂いているのですが、その時の１つの指標みたいなものを作って頂いています。これは、全国学力学習状況調査の質問を引っ張ってきて、この３つに当てはめてこんなふうに評価基準を作ったらどうかと学校教育課の方で準備して頂いている、案の段階ですけれども。当面は、今お話しさせて頂いているような事をこの小中一貫の中で少しずつ具現化出来ればいいかなと考えています。私からは以上です。

（丸山市長）

ありがとうございました。最初、鈴木教育長に次の教育長をお願いした時に、複式学級云々の話が出てきました。最初から否定するのはどうなのかというような話があって、なぜそのように思われるのかなと疑問に思ったのですが、今お話を聞いてよく分かりました。なるほどなと思って納得したところでございました。酒田市がやろうとしている小中一貫教育だとか、あるいは GIGA スクール、コミュニティ・スクールも含めてですけれども、色んな話に広がる要素がいっぱい含まれた話だったかなと思いました。ここからは皆さんとやり取りをしたいと思っております。全般的に少しご感想などをお聞きしたいなと、或いは何か補足をお願いしたいような事があれば出して頂ければと思います。ここは大学教育も同じようなところがあるのかもしれないという事で、神田委員から何か口火を切って頂ければと思います。

（神田委員）

資料自体は頂いていたのですけれども、説明をして頂いて大変感銘を受けまして、やはり

これからの教育はこうでなければならないと思ったのですけれども、大学で考えていることも合わせての感想になりますけれども、話をさせて頂きたいと思います。まず今回、「学校教育について」という事をテーマとして取り上げたのは非常に重要な時期であると考えておりまして、その理由としてデジタル、ＤＸが非常に大きいのではないかというように思っています。昨年度は、新型コロナウイルス感染症の影響もありまして、大学ではオンライン授業というのを初めて経験するような状況であった訳ですけれども、全国的、全世界的に実証してみて分かったことは、オンライン授業は割と良いんです。特に知識を身に付ける、獲得するという観点で見ると、オンデマンド授業というのが割と有効だという事が分かってきています。特に学生、おそらく小中学校でも同じだと思いますけれども、優秀な人もいれば苦手な人もいて、オンデマンド授業の場合は、優秀な人であれば早回しで再生をすることも出来る。常に同じペースで見る必要はなくて、得意な人であれば例えば 45 分の授業、大学では 90 分の授業を 1.5 倍で見て、2 倍の速度で見て理解をすることも出来るし、苦手な人はゆっくり再生したり止めながら見るという事も出来る。また、ＡＩの技術が進んでくれば、問題を解いていく中で本人がどういうところが苦手なのかというところが分かりますから、補習をしていく事も可能になってきますので、純粋に知識を身に付けるというスタイルの授業であれば、あえて学校でなくてもパソコンに向かって作業すれば十分身に付いてしまうのかなというように感じています。そうなってくると、では、学校では何を教えるのかという事を改めて考えなければならないと思っておりまして、純粋な知識を身に付けるというのは、もうパソコンで出来るだろうと。そういう事でなく、学校に残される教育というのはいったい何だろうかというと、私自身も感じていたのは、先程木の絵がありましたけれども、やはり根っこの部分なのだろうと思います。学びに向かう力であるとか、主体性、パソコンがあってこれで学べますよと言ってみたところで、やはりやる気がなければそれは使わない訳なので、生涯学び続ける力というか、また関心を持って様々な事に取り組んでみる意欲といったところを高めていく事が非常に重要になってくるのであろうというように考えています。その時にどのように進めていくのか、というところを更にお伺いをしたいなと思っているところでが、ここでやはり私自身はオンラインが活用できると思っていまして、あらゆる事を学校の先生方で全て対応していこうとすると、特に教育の方法を変えていかなければならないという事になると負担も大きいですし、働き方改革の中で出来る事も限られてしまうと思います。現在であれば、オンラインを活用して相互に交流をすることが可能になります。他流試合などをすると、非常に成長に繋がっていくと思いますので、他の学校と繋いで探求学習の成果を発表するような機会、いくらでも作っていく事が出来ると思いますので、そういう場を作って、その発表の場に向けて後は子ども達にやってもらうというような、こういうやり方が有効なのかなと大学では考えています。

もう１つは、先程教育長の話ではスタディサプリの話がありましたけれども、全て内部で作り込むという事ではなくて、外部の資源を活用するのも非常に有効なのだろうと思います。先程の知識に関係するものについては、スタディサプリで十分身に付くと思いますし、大学ですと慣用的な技能であるプレゼンテーションとか問題解決の方法というのは、教員が自分

で勉強して話すよりは専門家に話してもらった方が分かりやすいです。我々がコンテンツを作り込むよりも、結果的に早いということもありますので、そうした外部資源の活用についても考えているところです。ですので、外部との連携だとか学びの場の確保というところ、後は大学資源の活用なんていうところが大切かなと思いました。

もう 2 点ありまして、1 点がキーワードとして上がってきた個別化とゆるやかな協同化、探求化というのが非常に重要だなと思っています。昨今の流れですと、アクティブラーニング、主体的、対話的で、深い学びというものが重視されていますけれども、大学でも同じです。大学での課題は、コミュニケーションを取るのが苦手な人からすると、非常に授業を受けるのがしんどいんですね。これまでは教室で黙って聞きながらメモを取っていれば授業に出席することが出来た訳ですけれども、それが許されなくなってきていて、コミュニケーションを取らないと授業に参加できない。それは結果的に多くの人にとっては良いのかもしれませんが、非常に負担感を感じる人もいるので、授業のやり方として個別化というのをどのように進めていくことが出来るのか。例えば、探求型の学習になっていれば、それぞれの持ち味を活かして得意な分野で活躍していくという事がもしかしたら出来るかもしれない。常に話し合いをする訳ではなく、調べ学習とその成果の発表というような事であれば、特に調べるのを一生懸命頑張る人がいたり、成果を取りまとめて発表する人がいたり、というような事で個別化というものが取り入れられるのかなと思いましたので、このあたりの実現方策についてはまた是非色々と伺わせていただきたいと思います。

3 点目は、最後の方でありました学習する学校というところですね。これもやはり重要だと思うのですけれども、これを実現するためには、やはり変革を重視するトップマネージメントが大切なのかなと思います。先生方の考えとしては、どうしても負担感を感じてしまうので、新しい事にチャレンジをしていくというのは必要だと思っていてもなかなか一歩足を踏み出すという事が難しいと思うのですが、それが大切だということで、とにかく進めてみる。やってみると良さが見えてきますので、是非継続してやろうという事になってくると思います。これをどう推進していくかという事を考えた時に、個人的に思っているのは、校長先生の任期が非常に短いので、割と先生が変わるたびに方針が変わってしまうのではないかということが気になるところです。今 2 年位でしょうか。5 年位のスパンで中期的な計画を持って取り組んでいく事が出来ると進めやすくなってくるのかなと感じました。

（丸山市長）

村上委員何かありましたらお願いします。

（村上委員）

私も、色々と教育長のお話を聞かせて頂いて、なかなか「これから」を思うときがなかったので勉強になりました。ありがとうございました。

最初に、酒田市の教育目標「ともに生きる」という事を考えたときに、私はこの「ともに生きる」という思いが子ども達の根っこに育ってほしい、そういう思いを持っています。教育

長が資料に上げられた２ページにあるように、色々なものを超えて、皆一緒に生きているんだ、皆違っていいんだという思いを持って、学ぶことと生きることに繋がってほしいという思いでお聞きしておりました。
また、今一つは、学び方としては皆一緒とそれぞれ一人一人が、いったりきたりするのだと思います。一斉授業は１年生の入門期などを思うと、とても大事なところがあります。一斉に学ぶことで皆で頑張るんだという気持ちの中で学びを深めていくことがあるからで、８ページの説明をそうだろうなと思いながらお聞きしておりました。
　また、学びといったときに、学びのスタイルということで、この子どもにどんなスタイルが合っているのかなと考えたときに、ＮＨＫのＥテレで見たのは、書くことに対して障害を持っている子どもさんがいて、教室にいてもずっと数字が書けない、文字が書けないといった状況にあったことを話していました。それが、５年生のときにタブレットに出会って転機を迎えた、タブレットを使って、通常の学級で授業に臨んだ。そうすると、書くことの大変さが無くなったので、自分はその時から学ぶことが面白くなったというのです。現在、慶応大学に行って、パソコンを作って、将来は起業したいと思っている。物は物であって、物ではない。使い方なのだなと思いました。物と人と事とはよく言われますが、それらをどうやって結び付けていくことが大切な事だなと思いました。
　色々お聞きし、学校も変わっていかなければと思いながら、もう一つ思うのは、やはり教師の働き方を片方ではどうしていくか。文科省が教師にＳＮＳの発信を呼び掛けた「教師のバトン」というのを開いたときがあり、教師をしていた自分でさえも、それほどまでに大変さを抱えているのかというところがありました。そういうことも一緒に確保しながら、先生方は時間があれば教材研究なり、子どもの話を聞いたりする時間をきっと作ってくれるので、そういうこと（学校の改革を）進めていく上には一つの大事な側面ではないかなと思いました。以上です。

（丸山市長）
　分かりました。それでは渡部委員お願いします。

（渡部委員）
　教育長の資料を事前に拝見させて頂いて、それで今日のお話をお伺いして、人づくりとか人材育成の面で、日頃私の立場として、企業の経営者の立場として考えていることが色々共通している部分、共感する部分というのが非常にあるなと思いましたので、その中で私が感じた事を述べさせてもらいます。
　１点目は安心できる環境、心理的安全、全ての土台となる環境づくりというか、やはりどこでも大切だなと思います。経営者の立場として、社員そしてその家族の生活をやはり守らなければならないという使命がありまして、その社員が安心して多様で柔軟な働き方が選択できるようにと日頃から職場環境づくりに努めているつもりですけれども、やはり子ども達にとっても自由に学べる、安心して学べる土台作りというのは、子ども達の多様性を認めて、

取りこぼさない環境づくりが非常に大切だと思いました。この安心できる環境、心理的安全というのは生徒だけではなくて、先程村上委員がおっしゃりました通り、働き方改革で今一番必要な教員側にとってもこの環境づくりというのは大切なのではないかなと思いました。

2点目は、生徒の関わり方ですけれども、先生と生徒、企業で言うと経営者と社員、管理職と部下という関係になると思いますけれども、人づくり、人材育成は企業にとってとても大切な事ですけれども、経験上、社員の成長のスピードというのは人それぞれどうしても差が付いてしまうのが現状であります。私の仕事は植物を相手にしていまして、水やり3年という言葉が昔からあるのですが、ただ指示されて水を3年やっている受け身の社員と、3年の間に興味を持って植物を観察して成長を感じたり、疑問に感じたことを調べて実践するような探求的な社員ではやはり大きな差が付くと思います。一昨年あたりにちょうど講演会があって、リーダーが何もしないと組織は上手くいくという指示ゼロ経営という題の講演会あって大変勉強になったのですが、それは極端かもしれませんが、子ども達にあれこれ指示して言うのではなくて、信頼して任せる、結果ではなくて過程、プロセスもしっかりと見てあげるという事が大切だなと教育長の資料を見ながら感じたところです。安心して学べる環境づくりと目指すべき人材育成、人づくりというものを改めてお話を聞いて大切さを感じたところです。以上です。

（丸山市長）

教育長の話もそうでしたけれども、教育振興基本計画とは別に相反することは何もないのですが、言われて感じたのは、いわゆる教育手法というのか、手法の在り方を今までと変えていかないと教育長のおっしゃるようなこういう教育って成り立たないような気がするんですよね。その教育手法については、国家の教員の先生方、それから学校の方針としての校長先生の考え方、更にはそれを取りまとめる教育委員会の考え方がなくてはならないと思うのですが、結局義務教育なものですから、大学と違って任意に選択している訳ではないですよね。だけど私立の小学校、中学校の子は、自由意志でその学校の教育が良いと思えば試験を受けて行ける訳ですが、酒田の場合は市立の学校があって基本的に学区があって、そこに行かざるを得ないという、そういう基盤の下でこういった教育システムというか、これを酒田市の教育委員会として全うしていくためには非常に大きなハードルがあるような気がします。学校を全部取っ払って、好きなところに自由に行ってもいいですよ、それぞれの教室での教師だとか校長先生の学校の受入れ方針だとか、個性があったらば自由意志で選択して行けるという事になっていればいいですが、そうなっていない中で、その教育手法について理想とする教育手法を教育委員会として全ての学校に浸透させるということが実際可能なのかどうか分からないんですね。教育委員会って行政委員会ですけど、各学校とか各教員に対する言葉が悪いですけれども、そういう環境に、そういう学校とか教師の皆さんがそういう関係を持っていくための意図的な権限ってあるものなのでしょうか。1つの単体の学校であれば、東北公益文科大学であれば神田学長がこうするんだという事で、教員に強制的にやらせることも可能だと思いますが、あるいは理事長という職もありますから色んな事がやれると思い

ますが、義務教育の中で義務教育と教育委員会と各学校との関係で、教育手法についてまで手を突っ込んで何かをすることは実際可能なのでしょうか。可能だとすると、今教育長が言ったような、こういう価値観の下でこういった教育をしてくれっていう事を徹底することが出来る。そうすると、市内にいくつかある小中学校が、ある意味公平に、そういう機能を持った学校が色んなところにあるので、学校を選択しなくてもしっかりとした教育が受けられるような気がしますけど、そこのところを上手く言えないのですが、酒田市の教育委員会の実態としてはどうなのかちょっと分からないんですよね。

（鈴木教育長）

先程の小中一貫ですが、来年度の 4 月から本市の教育委員会として考える目標に向かってこういうことをしていきましょうという事で、これをベースに各中学校区で自分達の学校の目標を作っていく訳です。ですから、ここは全部共通になってくると思います。その上で特徴を出していくという事になると思うのですが、ですからそれぞれの学校で取り組めるものから 9 年間を見通した系統だったものにしていきましょうという話をしていますが、目標自体はそれでいけると思います。今市長がおっしゃられたことについては、出来る年齢、出来る教科・科目やりやすいものがあると思っています。例えば、先程少し例に出した麹町中学校なんかは、数学の授業をキュビナというＡＩのソフトを使って、導入も何も一切先生はしない、3 年間ほったらかしという授業をしました。そうすると、結果的に、早い子だと 4 割から 5 割位の時間で 1 年間で学ぶべきものが終わってしまう。遅い子でも 7 割、8 割の時間で終わってしまう。そこで生まれた時間で数学の探求の学びというような事をやった。そういうのは、先程神田委員からもありましたけれども、やりやすい教科だということだと思います。先生方と話し合いながら、手法について個別化がやりやすい教科・科目から、効果が上がっていると既にエビデンスのあるものについては是非やっていきましょうという事で、共通了解を得られるのではないかなというふうに私は思っています。一気に全部というのは無理だと思いますが、そういうところから取り組んでいく事が今のところ具体化していきやすいかなと思っています。

（神田委員）

評価を上手く組み込んでいくと出来る可能性があるなと思います。別の話をしますけれども、免許を取りに来た人をどう教育するか。教習所の教育、教習の話を少ししたいのですが、教習所としては出来る限り早く合格して免許を取ることが出来ます、それが教習者を呼び込む上では一番いいのですが、本来重要なのは、免許が早く取れますという事ではなくて、実際に道路に出た後で自ら考えて安全になるためにはどうしたらいいかという事を自分自身で判断して振舞える人を育成していかなければならないので、学科試験に早く受かりますとか、そういうのは本来的にはどうでもいい事なんですね。現在行っている学校教育というのを考えた時に、テストで良い点を取るという事自体が目的ではない訳で、その後、将来自ら考えて酒田の教育振興基本計画に謳っているような時代の変化に対応できるたくましい人材を育

成していかなければならないという事をやはりしっかり評価していく必要があると思います。これを評価していった時に、おそらく現状で 100 点満点の教育が出来ているという事は大学でも無くて、やはり何かしらの改善点が出てくる。その改善をしていくためにより良い方法というのを提案していく中で、マストではないかもしれないけれどもチャレンジしていく事が出来ると思います。今回は小中一貫というのを導入してみようと思っている訳ですので、自ら考えて行動出来るような人材が本当に育成出来ているのかどうか、小学校の教育が本当に上手くいっているのかどうか、点検評価する仕組みが作れる訳です。そこで、より良い方法としてこういう教育手法を使ってみると割と良いみたいですよという事をまずは紹介して、リード校区からまずやってみようというところがあればやって頂いて、効果が出てくれば広げていく事が出来ると思いますし、最初から全部やれというのはなかなか難しいかもしれないですけれども、広めていく事は出来るのかなと思います。

（丸山市長）

皆さん何か聞きたいことあればお願いしたいのですが、教育長何かございますか。

（鈴木教育長）

先程神田委員の方からも外部の資源を使うという事。今回の GIGA スクールもそうですけれども、先生方の研修が大事だとかそれはもちろんそうですが、先生方に負担がかかる、教材を開発しなければならない。そうではなくて、既に良い物が沢山世の中にはあるので、それを評価検証して、酒田市としては何を使うかというのをまさに今からやろうとしているのですが、そういった外のものに頼るという事がすごく大事かなと思っています。

もう１つは、例えば全国で著名な方の授業とか動画って沢山出ているので、それを先生方も子ども達と一緒に見たり、あるいは自分でも見て一緒に勉強していくという、そういうスタイルってすごく大事かなと思っていて、特に小学校は今年の倍率１.３という状況ですので、これから新規で採用される先生方も大変だと思います。だとしても、既にそういうお手本となるような授業をして下さる動画とか沢山ある中で、自分もそれを見て学んだり、場合によっては生徒と一緒に見てここ分からないねと補足してあげたり、そういう外の力を上手に使うことはとても大事になってくるかなと。そうでないと先生方の仕事ばかりが増えていって大変だと。なので、先程の話の続きではないのですが、ノートの提出というのも高学年にあっては一切させていないという学校も沢山出てきていますし、ノートを提出させれば見なければいけなくなるし、そういった事も一切やらなくなってきている学校も増えてきているという事もお聞きしているので、今まで当たり前だと思っていたことを皆で見直していくというのはすごく大事な事だと思います。

（丸山市長）

酒田市教育委員会の 5 人の中で教育長がその代表となりますけれども、例えば、こういった理念で酒田市の教育はこれから取り組んでいくんだという時に、これは当たっているか分

からないけれども、ノートの提出はさせないというのは確率的な教育手法になるので私はあまり良くないと思うのですが、そうすると各校長とか先生方が自分たちの発想で判断するとなると、A という学校、或いは A という先生はノートを提出しなさいと言う教育手法を取りました。B という学校、B という先生は取りませんとなった時に、それはそれでいいんですか？根本にある教育委員会が持つ教育理念・教育手法に対する考え方も含めて、一定の考え方の基準、基本原則みたいなものがあるような気がするのですが、酒田の場合二十数校学校がある訳ですけれども、その中にいっぱい先生方いる訳ですが、どこまで徹底するべきなのか、すべきじゃないのかというところがよく分からないんですよね。

（鈴木教育長）

そこは基本的に対話が大切だなと思っています。

（丸山市長）

教育委員会と学校或いは教員との対話という事ですか。

（鈴木教育長）

私たちと校長先生とだったり、校長先生とそれぞれの学校の先生方だったりということになると思うのですが、目指すべきものが決まっていたら、何を優先させて何を引き算していけばいいのかというのは学校によって違っていいのだろうと思います。ベースになるところは一緒かもしれないですけど、例えば、ある学校区では英語にウエイトを置きたいという学校も出てくるでしょうし、教科として。ある学校ではそうではなくて、市民教育的なものに重きを置いたような教育に取り組みたいというのがあると思います。ベースがあってもそこに何を上乗せていくかはそれぞれの学校で特徴があって構わないと思います。なので、とにかく一つずつ、何を削っていくかも向かっていく方向を確認した上で、本当にこれでいいのかという事での対話を重ねていくしかないと思います。

（丸山市長）

対話によってお互い納得づくであれば色んな事を変えていけるという前提で教育行政は考えた方がいいのでしょうね。

（鈴木教育長）

そうだと思っています。

（丸山市長）

文部科学省とかは、最大公約数的なこれだけは譲れないよというものがあって、それを学習指導要領とかでガチガチに押し付けている訳です。それもある意味考え方としては最低限それだけは守ってねと、あとは自由でもいいですよという意味では悪くはないと思いますが、

ただ、今は先生方がそこの部分で皆忙殺されていて、全く余力がないという状況になっている事態は好ましい事態だとは思っていませんが、その辺がいわゆる小学校、中学校の教育体制と私立の大学が対比すると面白いなと思うので、根本的に違うような気がしますけど。大学も国立とか県立とかで違うのかもしれないですけれど、全く自由な発想でやれている訳でもないですよね。大学だって文部科学省の管轄で管理があって、その枠の中では義務教育の小中学校よりは教員の先生方は自由に色んな事を考えたり、指導方法とかそういうものを駆使しながら魅力ある大学とか学校とか、そういったものを実践されていると思いますけれども、義務教育の中ってなかなか難しいですよね。だけど、学校なり学校の先生方にもうちょっと遊びの部分があるのであれば、確かにそういった形で期待はしたいなと思うのですが、現実的にはなかなか難しいのかなという感じで聞いておりました。高等学校は県教委の縛りはあまりないのでしょうか。

（鈴木教育長）

私は高校しか分からないし、現場にいなかったですが、高校はあまり県の教育委員会とか文部科学省とか気にしたことがなくて、それよりもむしろ、うちの学校の特徴はというのを前面に出そうという事の方が強かったですね。

（丸山市長）

基本的に探求化とか全国一律の流れの中でそういう学科とか教育方針みたいなものが上から降りてきたものではないのですか。

（鈴木教育長）

全くないかと言われればもちろんそうなのですが、ただこういう言い方は誤解を招くかもしれないですけど、10 年に 1 回学習指導要領が改訂されますが、変わった先からだいぶ遅れている部分が世の中のスピードからするとあるのではないかなと思います。それも踏まえた上で取り組めばいいのかなと思っているので、なので義務教育の 9 年間では学力の保障をきちんと 9 年間で先程の心理的安全性も含めてですけど付けるってことに尽きると思います。今の段階で今のようなやり方で内々のやり方で学力の保障がみんな出来ているかとなった時には、100%と言われればなかなか難しい。より一人一人に沿った形をして、9 年で学力の保障により近づけていくには今のスタイルではダメだよねという事は多くの先生方が分かっている事だと思います。あとはどうやっていくかという事だと思うのですが、そういう意味で個別化をどこまで、どういう所から取り入れていけるかというのはとても大きな課題だと思っています。

（丸山市長）

そういう酒田市の教員の皆さんが問題意識を教育委員会として吸い上げる場というのはあるのですか。

（阿部学校教育課長）

小中一貫の話にも繋がっているのですが、今校長先生方からすごく意見を聞いて、今回の小中一貫教育の教育委員会としてのスタンスというものを作り上げてきました。これまでだとボトムアップということを強調し過ぎていて、各学校区でやれることをどんどんやってというスタンスだと上手くないだろうと。やはり酒田市としてはこういった子どもを作りたいという事がこの教育目標にある訳でありまして、そのための施策として小中一貫教育を頑張っていこうという時に、やはりしっかり現場の声を吸い上げられないとダメだろうと。聞いた上でこちらはこういった方針でいきたいですという事を伝えていて、推進会議を 2 回開いています。そういった事が先生方に伝わっていきながら、あと各中学校区においてしっかり共通理解を図りながらこういった取り組みをすれば、自分の学校ではこういった目標に繋げられますねという事を今揉んでいるという状況だと考えています。学校に行って授業研究を見て、こういった授業してみてはどうですか？という事を指導主事が聞いてくる場合ももちろんありますし、我々が出向いて校長先生からこういう経営方針していますけれどもどうですかという事もあります。市全体としては、今話した通り小中一貫教育に向けてこういった方針でいきましょうという事でまとまってきつつあると自分では思っています。

（丸山市長）

まだまだ話足りない部分があれば出して頂きたいと思いますけれども、是非私は今教育長がお話になったこういった精神というかを、個々の先生方にしっかり心に刻んでもらえればいいかなと思います。そのための組織として教育研究センターがしっかり機能してもらえればありがたいなという思いで話を聞かせて頂きましたので、是非鈴木イズムを酒田市教育委員会として徹底できるような、そういった場を設けてもらいたいなという思いで聞かせて頂きました。私は最終的なまとめですが、皆さん何かございますか。

（村上委員）

是非やっていったことが酒田らしさのある教育というか、酒田ってこういう教育の特色があるね、酒田の子どもってこうだよねって語れるようになって欲しいなというような思いでお聞きしました。

（丸山市長）

なかなか教育は難しいですけどね。たぶんこの中で一番私がそういう教育を受けていない人間なものだから、語弊がありますけれども、しっかりした学力さえ与えてもらえれば、小中学校にはあまり期待をしない世代だったものですから、人間のその後の人生の生き方まで変わるようなそういった特に義務教育での働きかけというものに対してはそんなに高い意識を持ってきた人間じゃないので、今鈴木教育長の話を聞くと、今は教育に求めるニーズというのはすごいものがあるんだなという事で、改めて教育委員会の所管エリアの広さと重さに感銘を受けてしまいました。そういった意味では、是非教育委員会の皆さんから酒田の子ど

も達の育ちに大きなインパクトを与えるような、そういう教育を展開して頂ければありがたいなと思いますけれども、最後に教育長からまとめ的に或いは質問に答えるような形でもお話頂ければ。

（鈴木教育長）

今、市長からお話あったように１つの学校であれば、例えば自分が校長でその学校をというのであれば先生方と話をしながら一気に変えていく事が出来る。これは当然やりやすいと思います。ところが、酒田市で小学校が 22 校、中学校で 7 校、全部これを一気に同じ方向で、逆に全部が同じ方向だとそれはそれで問題かなと思いますが、そういった意味でも小中一貫は一つの良い手法として、それを使って各学校区にベースなる考え方を落とし込んでいって、それを今柱になってくださっている中学校、小学校の校長先生方が一生懸命自分の学校区で会を開いてくださって、先生方に落とし込んでくださっているので、そういった事を繰り返していく、すごく私にとってはありがたいです。小中一貫の一つの柱になっていくところです。これを皆で成功させていきたい。ただ成功かどうかはやはりどう考えても１年生で入ってきた子が中学３年生で出るまで９年間かかるので、長い目で見ていかなければいけない訳ですが、そうは言ってもきちんとした指標を持ちながら、評価基準を持ちながらやっていく事で、今日お話ししたような事が少しずつ実現していくのではないかなと思います。形になって表れてくれば、おそらく、間違いなく酒田は違う事をしているぞ、色々個人が尊重されてやっているらしいよという事になってくれば、現に先ほど少し映した広島や軽井沢には他県からどんどん人が移住していますし、話題にした麹町中学校にしても一家転住で千代田区に住所を移している方々もいらっしゃるので、そういう方が少しでも増えてきて、酒田で教育を受けて育てたいというような方々が増えていってくれるとすごくいいなと考えております。まとまりのない話になりましたが、そんなふうに思っております。ありがとうございました。

（丸山市長）

まさにそういう酒田になってもらいたいなという思いを込めて、教育委員会の方に期待をしたいと思います。よろしくお願いします。それでは今日の懇談はここまでということで池田次長にお返しします。

４　閉会

（池田教育次長）

お疲れさまでした。事務局から連絡として、次回の会議日程についてですが、具体的な開催日、時間、協議事項等につきましては、改めて事務局よりご連絡を皆様に申し上げますのでよろしくお願いいたします。

それでは、これをもちまして、令和３年度第１回酒田市総合教育会議を閉会いたします。

どうもありがとうございました。